

資子内親王の生涯

—— 円融朝歌壇の一側面 ——

安 田 徳 子

鎌倉時代中期に撰ばれた「万代集」には、「拾遺集」「後拾遺集」初の歌人の詠が多数入集していることについてはすでに少々考察を試みたが、この中には、歌人としてそれほど高い評価を受けていない人々の詠も多く見出される。特に、円融院八首をはじめ、具平親王九首、選子内親王七首、藤原兼家四首、藤原懐子四首、源高明九首、藤原輔尹四首等、円融院周辺の人々の詠が多い事が注目される。この他に勅撰集には入集していなかったり、一首程度入集しているだけの歌人でも資子内親王一〇首、源時明四首等が見え、円融院とその周辺あるいはその時代の和歌について、「万代集」の撰者が強い関心を持っていたことが窺われるのである。「万代集」の撰者がなぜこうした関心を持ったかについては非常に興味深いのであるが、この事を考える前に、円融院の時代の和歌について考えておくべきであろう。

ところで円融朝の歌壇は「後撰集」と「拾遺集」の時代の谷間に位置し、時には「後撰集」時代の延長上に、時には「拾遺集」時代の先駆けを成すものと位置付けられたりしている。しかし、こうした歌壇史的評価はともかくとしても、この時代の歌壇の状況について十分に検討がなされていると言えないのが現状であろう。そこで、円融朝の

歌人の足跡を追跡しつつ、この時代の歌壇の性格を考えてみたいと思ふのであるが、本稿ではまず、資子内親王を採り上げてみることにする。

(一)

資子内親王は勅撰集では僅かに「玉葉集」に一首入集するだけの歌人であるが、「万代集」に一〇首の歌が見られる他、「齋宮女御集」「円融院御集」等にも歌が見え、また歌会、歌合の主催者となった記録も存するので、当時の歌壇に相当の影響を与えた人物と見ることができるのである。

まず、資子内親王の系図を示すと次の如くである。

資子内親王は村上天皇の第九皇女、母は九条師輔の女安子。その誕生は、長和四年（一〇一五）四月二六日資子内親王の薨じたことを記した「小右記」（『大日本古記録』による）の記事に

「先一品宮薨薨 第六十一、色上 来相日來炊時行」

とあることから逆算すると、天曆九年（九五五）ということになる。

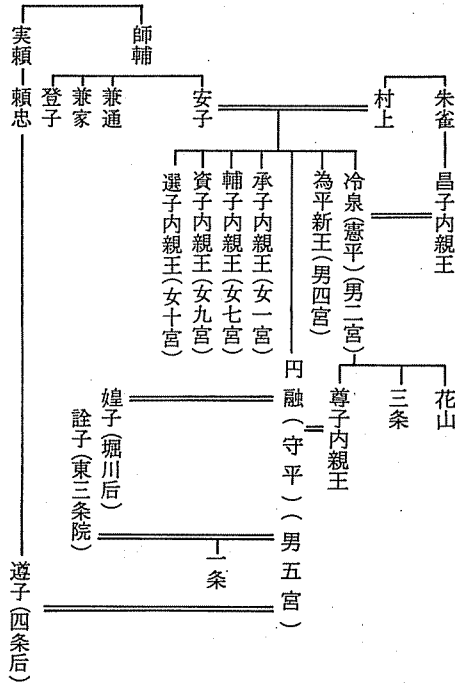
同母の兄に皇太子憲平（後の冷泉天皇）、為平内親王、姉には承子（四才にて夭折）、輔子内親王があり、弟に守平親王（後の円融天皇）妹に選子内親王（大斎院）がいる。特に円融天皇は資子内親王より四才下

の弟で天徳三年(九五九)三月二日の誕生であり、後に詳述する如く、生涯を通じて最も親しい姉弟であった。

さて、「西宮記」裏書(『大日本史料』所収)によれば

応和元年(九六一—筆者注)十一月四日御記云々々、輔子、資子内

親王始謁見、



とあり、資子内親王は姉輔子内親王と共に初めて正式に父天皇と謁見した。この折のことと思われる記事が「栄華物語」(『日本古典大系』による)にも中宮安子の生前をしのぶ記事として

後の宮おはしまし、折、九の宮などの御対面ありしなどこそ、いみじうめでたかりし(か)など、上の女房達は、夜昼宮を恋ひ忍びきこえさする様おろかならず。(月の宴)

と見え、華やかな謁見であったことが窺われる。また、「和歌合抄」や「夫木抄」によれば、応和二年(九六二)三月には、「資子内親王歌合」が催されたことが知られる。この年資子は八才であり、自ら歌合を主催できる年齢ではない。この歌合は現存しないのでその実体は不明であるが、おそらくこの歌合の真の主催者は萩谷朴氏も御指摘の如く、父村上天皇であろう。こうした記録から窺われるように幼年期の資子の周辺には華やかな雰囲気があったよって、多くの皇子女の中でもこの資子は父母の愛情をより多く受けていたと思われる。

しかし、資子一〇才の康保元年(九六四)四月二九日妹選子内親王(後の大斎院)を出産して母中宮安子が崩御し、二年おいて康保四年(九六七)五月二五日父村上天皇も崩御した。資子の父母に対する追慕の念は天元三年(九八〇)五月二四日の村上天皇のための法華八講をはじめ、正暦元年(九九〇)三月二八日安子のための法華八講、寛弘六年(一〇〇九)五月二五日村上天皇供養等しばしば法会を主催していることから窺われるが、「玉葉集」(『新編国歌大観』による)雑四に、
一品資子内親王の許より、村上のみかどのかかせ給へるものや
とたづねて侍りけるつかはさるとて 選子内親王

こをおもふ道こそやみとききしかどおやの跡にもまよはれにけり
(新編2420)
の一首が見え、後年資子が村上天皇の遺墨を求めたことが知られるのであり、父を偲ぶ姿を見ることが出来る。

(二)

父崩御の後を襲つて兄冷泉天皇が即位し、その年の九月一日弟守平親王が皇太弟となつた。また、同じ四日には従姉妹に当たる朱雀院皇女昌子内親王が冷泉天皇の皇后となつた。さて、安和元年(九六八)一月二八日一四才の資子の著装の儀が行われ、三品を授けられ、翌年一月五日三品に叙せられた(日本紀略)。この年いわゆる安和の変が起り、三月源高明が太宰権帥に左遷され、八月一三日には冷泉天皇が讓位し、円融天皇(守平)が即位した。円融天皇の即位は兄為平親王を越えたものであり、摂関の実権を確立しつつあつた藤原北家の政略の賜物であつたが、円融天皇と最も親しい姉弟であつた資子の生活はますます華やかなものとなつた。

天祿三年(九七二)三月二五日、「日本紀略」に

資子内親王於「昭陽殿」有「藤花宴」。天皇臨御。宴訖。内親王叙二品一。

とあり、資子が内裏昭陽舎において藤花宴を催し、元服したばかりの円融天皇も臨御し、この日資子は一品に叙せられたことが知られる。ただ、「国史大系」頭注にも指摘されている如く、昭陽舎(梨壺)で藤花宴というのは疑問であり、飛香舎(藤壺)の誤りかもしれない。この頃資子がほとんど内裏住居をしていたことは貞元元年(九七六)年五月一日や天元三年(九八〇)一月二二日、天元五年(九八二)一月一七日の内裏出火の際、天皇や中宮、皇太子等と共に避難したことが「日本紀略」に見えるので確実であろう。その内裏での居所を

資子内親王の生涯——円融朝歌壇の二側面——(安田)

菽谷朴氏は東三条院詮子が入内して梅壺に住む以前は凝華舎(梅壺)であつた(注五)とされるが、これは天祿四年(九七三)五月廿一日「円融院・資子内親王乱蕃歌合」(『平安朝歌合大成』)による。以下歌合の引用はすべてこれによる。)の後の六月十六日「円融院勝態扇歌」の詞書に「梅壺にわたらせ給へるに」とあることや「相如集」(『私家集大成』)による。以下私家集の引用はすべてこれによる)に

一品宮、むめつほのたきのはなくらへさせたまひしに

くらふれとまさらさりけり花なからこの宮き野はきのした葉は(10)とある事によるのであろうが、「円融院勝態扇歌」の詞書は「平安朝歌合大成」の本文校異によれば陽明文庫本は、「六月十六日にうへせさせつほにわたらせ給へるに」であつて「梅」の字はなかつたとのことであるし、「親信卿記」(『大日本史料』所収)六月一六日条のこの日の模様を伝える記事には

主上渡御藤台、藏人朝光捧御鏡行前矣

とあること、さらに同じ七月七日「資子内親王負態扇歌」の詞書に

七月七月、宮、上の御局にのぼらせ給ひて、御負態させ給ふもの

ども、藤壺より殿上人あまたして、上の大盤所に参る。

とあることから考えると、『大日本史料』が指摘する如く、六月一六日の「勝態扇歌」は「梅壺」でなく、飛香舎(藤壺)で行われたのであり、資子の居所も飛香舎であつたと考えたい。とすれば、詮子入内後居所を変わったと見る必要はないし、円融院の後宮で藤壺に住んだ女性はいないのでその点でも矛盾しない。また、安和二年一月貞元元年

頃には東宮師貞親王が凝華舎にいたことが知られる(日本紀略)ので、やはりこの時期資子が凝華舎に住んだと見るのは適切ではなからう。

ただ、前述の「相如集」については問題が残る。あるいは「相如集」の記載に誤があるかもしれないが、このままだとすると、梅壺においては資子内親王主催の「萩花競」が行われたことになる。とすれば、資子は一時期梅壺に住んだことがあったのであろうか。「日本紀略」によれば円融院も東宮時代の安和二年三月頃から凝華舎にいたことが知られるので、もし資子が梅壺にいたとすれば円融院が受禪した八月三日以後、師貞親王が梅壺入りした一月二三日の間ということになる。あるいはまた、円融院が梅壺にいた時期に資子が仲のよい弟の御殿で「萩花競」をしたのであろうか。後者にはかなりむりがあると思うが、いずれにしても、このように考えると、「相如集」に誤りがない限り、この「萩花競」は安和二年ということになる。

このように見てくると、天禄三年三月の藤花宴も昭陽舎でなく、資子の居所飛香舎で行われたと見る方が妥当ではなからうか。この宴についてもこれ以上の資料がないので詳細はわからないが、一〇代の若い資子や円融天皇が実質的に経営に当たったとは思われないので、二人の外戚に当たる九条家の人々が関与したのであろう。

一品に叙せられた資子はさらに同年一月一六日年官・年爵を賜わり封戸を加えられて准后となった。「親信卿記」はこれについて

十二月十五日、〔資子准后事〕右大臣依召参御前、被仰云、以一品資子内親王、可准三宮之由、

十六日、令奏勅書、即返給、次召右近衛少将朝光於御前、被聞御消息於彼宮、々給録者、家司等申慶於宮云々、

と伝えており、円融天皇の資子に対する心遣いの深さが感じられる。円融天皇と資子の状況については「榮華物語」にも

内には、一つ御腹(の)女九宮、先帝いみじう思ひきこえ給へりしを、この今の上もいみじう思かはしきこえさせ給て、一品になし奉り給へり。内のいとさうぐしきに、おかしくておはします。(月の宴)

とその親密さを伝えている。幼くして父母をなくし、安和の変によって兄為平親王とも疎遠となったであろう円融天皇にとっては、身近な唯一の肉親と感ぜられたのであろう。

若い二人の住む内裏では、天延元年五月二一日前述の如く、二人を中心に資子の御殿で「乱甚歌合」が行われ、その勝態及び負態の扇歌が六月一六日と七月七日に行われている。時に円融天皇一五才、資子一九才。勝態及び負態の扇歌は記録が伝存するので全容が知られるが、「乱甚歌合」そのものは散佚して詳細はわからない。しかし、萩谷氏も〔注七〕御指摘の如く、「新千載集」に

天禄四年五月廿一日、円融院一品宮にわたらせ給うてらんごとなせ給うける次にそのかたの人に十づつの歌たてまつらしめ給うけるによめる 読人不知

あしたづのむれるる沢のさざれ石は千世の数ともおもほゆるかな
とあるので、十番の歌合であったと思われる。萩谷氏は右の一首の他(新編2275)

この歌合の詠として、「夫木抄」に「天祿三年五月資子内親王家歌合」と詞書のある五首を掲げておられるが、『大日本史料』はこれらは詞書通り天祿三年五月の『資子内親王家歌合』の時の詠としている。また、「和歌抄目録」巻五には

(資子)
同 一品宮歌合 天祿四年五月廿八日 有俊日記

資子
円融院 一品宮歌合 願註

とあり、天祿四年としても期日が二一日と二八日で異なること、二種の歌合があつた如く記されていることなど、問題点が多い。従つて、現存資料からはこの「乱暮歌合」の模様をこれ以上知ることはいかぬ。さて、その後の勝態、負態はそれぞれ扇を作つて奉り、殿上人等が参上して華やかに行われた。古歌等を扇に繡つたものもあつたが、この日のために詠進された詠もあり、七月七日の負態では後宴もあつた。参加した歌人は兼通、兼家、章明親王、為光、忠清、濟時、保光、博雅、時中、能宣等であつた。しかし、「拾遺集」や私家集によると「負態日記」に見えぬものや詠歌の作者が「負態日記」とは異なるものがある(注八)ので、当日の様をそのまま伝えては必ずしも言えず、この他に元輔、順ら歌を召された者があつたと思われる。これらの人々は専門歌人の他は菟谷氏の分析された如く「藤原氏の人の多くは、円融院一品宮の伯叔父、源氏の人の多くは、円融院や一品宮の従兄弟達」であり、この催しも前述の藤花宴と同様、「未だ一五才の少年であられた円融院よりも、外戚の伯叔父たる藤原氏九条家の人人の手に経営の責任が移つている」と考えられる。

このように円融天皇の初期の内裏では、円融天皇と資子を中心に、二人を満足させるべき宮廷行事が伯叔父である九条家の人々によつて計画、経営され、そこで詠せられた歌によつて円融天皇の歌壇が形成されていったと思われる。

(三)

さて、天延元年二月二九日には関白藤原兼通女皇子が円融天皇に入内し、七月一日には立后した。「栄華物語」には

かくてその年の七月一日、摂政殿の女御后にゐさせ給ぬ。中宮と聞えさす。はじめの冷泉院の中宮を(ば)皇太后宮と聞えさす。中宮の御有様いみじうめでたう、世はかうぞあらまほしきと見えさせ給(みかど)、一品の宮の御方、中宮の御方とかよひありかせ給。内わたりすべて今めかし。(花山たづぬる中納言)

と記されており、円融天皇を中心に資子は皇子とも親しんだ事が窺われ、宮中は若やいでいたようである。

この頃の資子の交友関係を見ると、齋宮女御徽子とその娘規子内親王がある。規子は村上天皇第四皇女に当たるので、資子の異母姉であり、母徽子は重明親王の女、資子には従兄弟であり、徽子の継母尚侍登子は資子の叔母であつた。親交はこうした深い血縁によるのであるが、徽子は歌人として高名であり、家集(齋宮女御集)を残している。これによつて交友の跡を知ることができる。天延三年(九七五)二月二七日規子は齋宮に卜定され、翌々年九月一六日には伊勢に下向することになったが、この折、母徽子も共に下向することを決意した。翌

一七日には先例なき事を理由に母の同行を留めるべき宣旨が発せられたが、それを押しつけて徽子は規子と共に下向している(以上日本紀略)。「齋宮女御集」(西本願寺本)によれば、この頃

一品宮より、伊勢の御くたりに

① わかれゆくほとはくもるをへたつともおもふころはきりもはらさし (74)

とほくなり給なむのちのかたみとて、内よりゑかきてとて、つきかみをたてまつり給へりけるを、こと物にたゞいささかつきつけ給て、くものすかきたるところには

くものいのかくくへもあらねともつゆのかたみにけたぬなるへし (196)

とほくなりたまふほとちかくて、おなし宮に

すきにしもいまゆくすゑもふたみちになへてわかれのなきよなりせは (175)

御かへし

② ゆくたひもすきにしかたをおもふにもたれをもとまるみをいかにせむ (176)

等の歌が見え、伊勢に下向する徽子規子母子への思いやりが素直に詠出されており、互いに気心が通じあっていたことが感ぜられる。(なお、小島切等によれば196には資子の返歌がある。)また、伊勢に下つてからも「宮の御ふくぬかせ給ふころ、一品宮に、いせより」等の詞書が見えるので、交渉のあったことがわかる。右の他に「齋宮女御集」中172、173、

174、226が徽子と資子との交渉を示す詠である。また、

内に、宮ひさしうきこえ給さりけるをり、六月秋のせちにわかれたりけるに、これよりきこえ給ける

夏もあきもゆきかふそらはなになれやおほつかなさのいつとなきかな (200)

御かへり

③ 思ひやるころはつねにそらなからゆきかふあきにそはぬはかりそや、194、195等は規子と資子との贈答であろう。これらに見る如く、資子と徽子規子母子との交渉は伊勢下向を中心としてかなり親密であったと思われるが、天皇の姉として時めく資子と遠く伊勢に下つてゆく徽子母子の運命は対照的である。しかし資子の詠は当時よく使用された語句を用いてやや類型的ではあるが、素直な詠みぶりで、よく徽子母子への心情が表われており、資子は徽子母子の孤独なわびしい心境を理解していたのであろう。規子は永観二年(九八四)八月二三日退出帰京し、寛和二年(九八六)五月一五日薨じている(日本紀略)。母の徽子はその前年寛和元年(九八五)卒している(日本紀略)が、資子との交渉はおそらく両者が死没するまで続き、徽子規子母子の孤独をなぐさめたことであろう。

(四)

ところで、貞元元年(九七六)十一月八日藤原兼通が薨する(日本紀略他)と、兼通に遠慮していた頼忠、兼家が次々と円融天皇に娘を

入内させた。まず、天元元年（九七八）四月一〇日関白藤原頼忠女遵子が入内し承香殿に入った。後に弘徽殿に移っている。続いて八月一七日藤原兼家女詮子が入内し梅壺に住むことになった（以上日本紀略）。後宮の華やかさとは裏はらに、皇后皇子が失意のうちに天元二年（九七九）六月三日堀河院に崩じると、後宮は遵子と詮子の対立する所となった。このあたりの皇子没後の世評を「栄華物語」では、

世の人例の口安からぬものなれば、「東三条どの、御幸のますぞ」「梅壺の女御后に居給べきぞ」などいひのゝしる。（花山たづぬる中納言）と記し、詮子立后の評判が高かったことを窺わせる。天元三年（九八〇）六月一日、詮子は第一皇子懐仁親王（後の一条天皇）を産んだので、ますますそのうわきは高まった。ところが、天元五年（九八二）三月一日大方の予想に反して遵子が立后した。この経緯は「小右記」に詳しいが、この年の二月三日条に

参四条殿、々下被参式、即候御共、皇后事有御気色之由、蜜云々有被仰事、是去廿日（良峯美子）小将命崩所告、仍与縁云々、

とあり、円融天皇は遵子立后の意志を示され、内々の内に事が進められ、良峯美子がこれに尽力していることが知られる。三月になると実質が円融天皇の命を受けて、遵子立后に連日奔走しており、遵子に対する円融天皇の愛情が感ぜられるところである。「栄華物語」でも、この間のこと

みかど、太政大臣の御心に違はせ給はじとおぼしめして、「この女御后に据ゑ奉らん」との給はすれど、大臣なまつまじうて、「一の御

資子内親王の生涯——円融朝歌壇の側面——（安田）

子生れ給へる梅壺を置きてこと女御の居給はんを、世人いかにはいひ思ふべからん」と、「人敵はとらぬこそよけれ」などおぼしつゝ、過し給へば、「なごてか。梅壺は今とはありともかゝりとも必ずの后なり。世も定なきに、この女御のことをこそ急がれめ」と、常にの給はすれば、嬉しうて人知れずおぼし急ぐ程に、今年もたちぬれば、口惜しうおぼしめす。かゝる事ども漏り聞えて、右のおとゝ内に参らせ給事難し。女御の御はらからの君達などもまいてさし出でさせ給はず。女御も心解けたる御けしきもなければ、一品宮は世にいふ事をもりきゝ給ひて、「さやうにおぼしたるにこそ」と、世を心づきなくおぼしきこえさせ給べし。（花山たづぬる中納言）

と記し、遵子立后を進める円融天皇とそれに抵抗する兼家、詮子とその兄弟の有様を描いている。また、この遵子立后の事について、資子が批判的であり、詮子に同情的であったことを述べているが、「栄華物語」では懐仁懐妊を記したところでも

一品の宮も、梅壺をば御心よせ思ひきこえさせ給へれば、いと嬉しうかひあるさまにおぼしきこえさせ給。（花山たづぬる中納言）とあり、さらに、遵子立后後、兼家が立腹して詮子を参内させない事についても

内の御使女御殿に日々に参れど、二三度がなかに御返は一度な（ど）ぞ聞えさせ給ける。一品の宮もいと心憂き事におぼし申させ給。若宮のうつくしうおはしますらんも、今年は三にならせ給へば、秋つ方御袴著の事あるべう、内には造物所に御具どもせさせ給、その御

事どもおぼしまうけさせ給べし。……一品のみやの御方に、上若宮抱き奉らせ給ておはしましたれば、いみじうもて興じきこえさせ給。「この御ために疎におはします、いと悪しき事なり」など申させ給へば、「いかでか疎には侍らん。自ら侍るなり」など聞えさせ給。(花山たづぬる中納言)

ともあり、常に詮子に好意的であった事が描かれている。資子と詮子は従姉妹に当たるので両人が親しくしても当然であろう。「円融院御集」には兼家が資子を介して懐仁親王の末をたくした歌と円融天皇の返事
一品宮にわかままいらせ給とて、銀のひけこに入て

東三条のおとゝ

わかなつむ腰はふたへに有なからのへの小松をたのみてそひく(41)

うへの御返し

こしをいたみつめるわかなのしるしにぞこまつのためしひかさらめ

やは

(42)

又

おとゝ

われそひく松のためしのあるへくは千世のねのひの花いくもみむ

(43)

が見え、これからも資子が兼家詮子父子と親しかったことは想像できるのであるが、一方

さねすけの大将と公任のしゝうと、こ打て、まけものに銀の籠

に松虫を入れて、弘徽殿に

万代のあきをまちつゝなきわたれいはほにねさす松むしの声(30)

とて一品宮にたてまつらせ給たりければ、宮

④かりそめのやとりなれとも松むしの千代本ノマならせるこゑにも有かな

(31)

うへの御返し

いまやしるかりねなりつるまつ虫の一夜に千代をこめてなくとは

(32)

の贈答も見え、遵子とその一族と資子、円融天皇の間も同様に親しかったらしい事が窺われるので、「栄華物語」に描かれた資子の言動は兼家に好意的な立場で少々誇張されたものかもしれない。それはともかくとして、右の二つの贈答歌からも窺われる如く、常に資子は円融天皇と意を通じあっていたのであり、天皇と共に円融天皇内裏の中心にあつた。この他、「義孝集」を見ても義孝をはじめとする公達が資子の御殿に遊んだことが窺われる(33-37)し、「輔尹集」では洲浜等を飾つた晴の会を資子が主催したこと(2)を窺わせるなど詮子、遵子の入内後も資子は後宮の中心的存在であつたことが知られる。

円融天皇の後宮には、他に天元三年一〇月二〇日、冷泉院第二皇女尊子内親王が入内し麗景殿に入った。後に承香殿に移つた。天元五年四月八日、理由はさだかではないが、自ら髪を切つており(日本紀略)、対立のはげしい後宮では尊子の生活は幸福なものではなかつたようである。この尊子の入内前後内裏から何度も火が出、この宮の事を世人が「火の宮」と噂したことが「栄華物語」に見える。資子と遵子の交渉については明確でないが、これらの出火の折(貞元三年五月二日、

天元三年一月二日、天元五年一月二七日に資子はいつちも宮中から避難した事が「日本紀略」等に記されているので、資子がこの頃も宮中住居をしていたことは確実であり、尊子との交渉もあつたであらう。「日本紀略」貞元元年一月九日条に

今日、一品内親王遷^(資子)御大納言為光御第一。

とあることから資子がこの時から宮中を出て叔父であり、従兄妹でもあつた為光の第に移つたとする説もあるが、前述の記事からしてもその後宮中に住んだと見るべきであらう。天元三年一月三日条に

今夜、一品資子内親王自^(資子)里第一移^(注七)職御曹司^(注八)。

とあるので、あるいは為光第は時折退下する資子の里第であつたのかもしれない。資子が宮中を出たのはやはり円融天皇の讓位の時と見るべきであらう。「円融院御集」には

月のあかき夜、まつ^{一品}の宮、しもにおりさせたまふに、うへ

てる月のひかりはしはしよそならはおもかけにのみまたるへきかな(25)

おほむ返し

⑤ひかりさす雲のうへ^{本ノマ、}のこひしくてかけはなるへきこちたにせず(26)といった贈答も見え、円融天皇と資子の深い結びつきが知られるのであり、円融天皇が資子を他所に住ませたとは思われない。

(四)

外戚たらんとする兼家の圧力の高まる中で、永観元年(九八三)三月三日円融天皇は仁和寺内に円融寺を新造し(日本紀略他)、翌永観二年(九八四)八月二七日ついに花山天皇に讓位して太上天皇となり、

資子内親王の生涯——円融朝歌壇の一側面——(安田)

堀河院に移つた。

その年の一月二八日「小右記」に

伝聞、今夜一品宮初遷行三条宮云々^{(資子内親王(拾九)}

とあり、資子はこの日その後崩御まで住んだ三条宮に移っている。三条宮は「日本紀略」正暦元年(九九〇)十月四日条に

皇^(資子)太皇太后宮圓^(資子内親王家)三^{自東洞院大路(西洞)遷御本宮。}三^{三条坊門南}条宮^{三條坊門北也。}云々

とあつて位置がわかるが、これは松村博司先生も御指摘の如く「権記」長保二年(一〇〇〇)八月一七日条に

招前讚岐介奉職朝臣、令^(資子)申一品宮三^(高倉取)条宮殘直事^(注一〇)、依左京大夫後家之旨一也

とあつて、資子が源泰清の後家から購入したものであつた。この三条宮の様子を「榮華物語」では後に三条院に改造した時の記事の中で、院の様わざと池・遣水なけれど、大木ども多くて、木立をかしうけ高く、なべてならぬ様したり。こたみはいと心殊に造らせ給へり。入道一品宮の年頃住ませ給ひし所なれば、理にぞ。昔とこそは今はいはめ、かの宮のおはしまし、時、四条大納言の権中将など聞えし折月夜に参りたまひて、誰ともなくて人を呼び寄せたまて、「女房の御中にかく聞えさせよ、松が浦島来てみれば」といひかけてぞおはしける程など思ひ出でられておかし。(たまのむらぎく)

とあつて、資子の住んだ三条宮の有様が窺われる。資子が情趣を解した女性であり、三条宮もそれに似つかわしい風情あるたたずまいであつたようであるが、資子が三条宮に移住後も公任等が訪れてしやれた会

話を楽しんでいた事が窺われる。また、前述の正暦元年一〇月の記事や「仲文集」の

たいわうの宮、やけて、おはしましところなしとて、一宮にわたらせたまて、又ほかへうつらせたまふに、しろかねのはちすにこかねのつゆをかせたまて、めし、に

おもひおけるはちすのつゆのたまさかにかたみにかよふひかりともみよ。(81)

等からも知られるように、資子の住居には太皇太后昌子が渡御していた時もあったりして、資子の三条宮での生活は比較的にぎやかなものであったようだ。

さて、花山天皇の東宮には兼家の期待通り懐仁が立ち、円融院に対する兼家の不満は解消したので、譲位後の円融院には兼家は十分な心遣いをしている。円融院は讓位と共にその鬱憤を晴らすかの如く、次々と御遊、御幸を行い(日本紀略、小右記他)、その華々しさは目を見はるものであった。特に寛和元年(九八五)二月一三日の紫野子日御遊は盛大で、兼家以下公卿が供奉し、兼盛・時文・元輔・重之等の歌人が召され、和歌も詠せられた。好忠が御指召もなく参上して追立てられた話はこの時である(小右記)。円融院は三条宮の資子にこの日の小物と共に歌を贈っている。「円融院御集」に

こものともおかし一品の宮のおほんかたにたてまつらせ給とてのへにてはあやしきこともありつれとつたふはかりの松のねをみよ

(58)

宮のおほん返し

◎よろつ代をのへにとき、し松なればちよのねさしのことにも有かな(59)

住居は異にしたが相変わらず円融院の資子に対する心遣いは続いていた。

寛和元年八月二九日、円融院は病により出家し、法皇となった。その五ヶ月後の寛和二年(九八六)一月一三日資子も理由は明らかでないが、円融院の跡を追うように出家している(日本紀略)。出家以後の円融院は円融寺を御所としたが、引き続き御幸は盛んで、寛和二年三月には奈良東大寺で受戒、永延二年(九八八)一〇月には延暦寺に登山し受戒を受けているが、いずれも盛大な催しであった。その間に寛和二年六月二三日花山院が突然出家し、一条天皇が踐祚した。しかし正暦二年(九九一)二月五日円融院は崩御した。おそらく、資子の落担は大きかったであろうが、それを伝える記録はない。さらに同年九月一六日詮子が落飾し東三条院と号したが、長保三年(一〇〇一)崩御し、皇后遵子も長徳三年(九九七)落飾している。また、長保元年(九九九)一二月一日には親しかった太皇太后昌子が崩御しており、資子の周辺は次々と近親者が世を去ったり出家して、さびしくなっていた。出家後も資子は三条宮に住んだが、時折、父母や円融院の法会を営む(日本紀略・権記他)他は静かな生活であったらしい。特に円融院崩御後は前述の長保二年八月の「権記」の記事や薨じた時の邸売却の記事などから見るとわびしいものであったかもしれない。

ところで、「栄花物語」によると、

大将殿上の御弟の中の宮に、この宮を婿取り奉らんとおぼし心ざしたりけるなり。……あるが中のおと宮は、三条院の入道の一品宮の御子にし奉らせ給し、まだ十ばかりやおはしますらん、こたみの齋宮にゐさせ給ぬ。その御扱ひも、たゞこの大将殿よろづせさせ給(たまのむらぎく)

とあり、資子が具平親王第三女嬪子女王を養女にしたことが知られるが、杉崎重遠氏によれば長保五年(一〇〇三)齋宮に卜定された時嬪子は一二才であったのだから、養女となったのは円融院崩御後ということになる。晩年の孤独をまぎらすために姪を養女としたのであろう。

長保四年(一〇二五)四月二六日資子は薨じた。六一才であった。「小右記」には

先一品宮薨(資子内親王 春秋六十一、色上光相主 第九如親王 女)日來炊時行、親王別当天納言齊信長(資子)、今晝参面山、親王家事無執行之人、終焉之事委付齊信卿、而忘却其事、如不聞建行、上下誹謗耳

とあり、資子は近来病氣であったこと、にもかかわらず資子の別当齊信は南山に出かけてしまつて終焉後の処置ができない状況を伝えている。この前後「日本紀略」によれば「疫癘屢發。死者多矣。」とあるので、資子もこれにかかったのであろうか。さらに、二八日の「小右記」には

参故一品宮、謁除寛僧都、良久談話云、宮去廿六日未刻許終給、又云、其日拂晝大納言齊信参南山、不此宮人、世間人所奇驚、太不足言、四人僧網籠居、皆預宮供之人達者、大僧都深覺、少僧都勸察、又云、沾却此宮

資子内親王の生涯——円融朝歌壇の一面——(安田)

可充仏事々・池事等、初書置、毎七日可被供養經、尋光云、来月二日当初七日、彼日大納言奉御燈明、又奉為故宮御息灾奉供養經、同日被供養七日御經、可有忌者、此事甚奇怪事也、不可聞入、仍不違遺言可奉供養者、亡者息灾祈未知其由耳、又云、大納言不還向之前、不可行御葬送事、可待彼帰、但入括事今日可行云々(括主)

と伝え、齊信の行動を批難すると共に、資子が邸を売却して仏事に充てるべく遺言していたことが述べられている。齊信のこの行動は前代未聞のもので世間の批難が集中したことではあったが、このことはまた資子がすでに重要な存在と見られなくなっていた証拠でもあろう。

「御堂関白記」二八日条、「小右記」二九日条によると道長の命で、齊信の帰京を待たず、内大臣公季が資子葬送を執行することとなり、翌五月一〇日に行われた。

今日有故一品宮薨奏事、着御錫紵云々、今夜葬送云々、昨夜奉移山寺云々

と「小右記」は伝えている。その後の法事もとどこおりなく行われているが、同年八月二七日「小右記」に

資平来云、定輔被抽任之事、兩度成功、又買故一品宮、三条、獻至尊、為後院

とあって、三条宮を定輔が購入して三条天皇に献上して後院としたことを伝えている。法事の費用はこれでもかなわなかったのであろう、長保五年三月二九日一周忌の法事も盛大に行われている。この時の「小右記」の記述の中に

故一品宮周忌御法事、於律師朝寿寺被修(マリア)、彼宮件寺内建立一堂、仍所被修云々、

とあり、「御堂関白記」にもこの事が記されているので、資子が生前、朝寿に帰依し、その寺である円教寺内に一堂を建立していたことが知られるのである。

六

以上の如く、資子の生涯を見てきたが、歌人としての資子について少々見ておきたい。

現在、資子の詠と思われるものは、「円融院御集」に五首(26・29・31・34・59)、「齋宮女御集」に五首(西本願寺本によれば四首(II 74・176・195・201)(註三))他に小島切等によって一首(I 120、III 62、IV 28)、「玉葉集」に一首(1371)、「万代集」に一首(23・349・367・1136・1778・1948・1982・2767・2953・3759)、「夫木抄」一首であるが、重複分を除くと、一七首となる。他に「続詞花集」に「万代集」1778と同じ歌が「読人しらす」として見える。右の内、「万代集」は資子の没後一五〇年近くも後に撰ばれたもので、そこに一〇首も見えることは注目すべきことであるが、今この理由は明らかでない。あるいは「万代集」撰者が資子の詠歌資料を偶然に入手したためとも考えられるが、冒頭に記した如く、資子の他にも円融院や源時明、藤原惟成、具平親王等の詠も多いので、「万代集」撰者が資子の生きた時代の詠への関心が大きかったことが知られる。撰者はこの時代を次の一条院時代に続く公家全盛の時代と見、一種の憧憬をこめてこの時代の詠歌に注目したとも考えられるのである。このことは

「万代集」に道長(一五首)、上東門院(七首)等の詠が多く見えることや「栄華物語」と共通する詠(四六首)が多いことも関連しているであろうが、この点については円融院等を検討した後に改めて考察したいと思う。

さて、現存の資子の詠は詠歌事情の不明なものも多いが、事情の明らかなものには大方贈答歌であり、実生活と密着したものであって、歌人として歌会や歌合に詠出した形跡はない。個々の資子の詠を見ると、前に示した①②⑥や「万代集」の中の

⑦あしひきのやまなかりせははるかすみたつをあはれと人は見まじや

(23)

⑧こゑたえすなになくならむうくひすのはなをはえたにおしみとゝめて

(349)

⑨ちることのなからましかはさくらはなはるのかきりのものはおもはし

(367)

⑩たきつせはをとにもきし恋すれはまくらにおつるなみたなりけり

(1778 || 続詞花)

⑪こひはなをけふりそたえぬよますからふしのねてのみあかすとおもへは

(1948)

⑫ゆめちにはなこそせきもなしといふにこひしき人のなとか見えこぬ

(1982 || 玉葉)

⑬わくらはにくるひとまてはあをやきのいとあはれに見ゆるはるか

(2766)

を見て、前にも指摘した如く、やや典型的表現が多い。例えば①は「古今六帖」の

別行く道の雲居に成ぬればとまる心も空にこそなれ
(33223)

と上句が類似しているし、⑦は「古今集」の

吹く風と谷の水としなかりせばみ山がくれの花を見ましや
(118)

⑨はやはり「古今集」あるいは「伊勢物語」の

世中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし
(53)

と類似した詠法や歌境である。さらに、③もその贈歌と共に「古今集」

168が背景となっているし、⑧⑩もそれぞれ「古今集」の106、552や657等

の詠と共通した点が多い。また、すでに『斎宮女御集注釈』にも指摘

があるが、③は「朱雀院御集」の

おもひやるころは空にあるものをなとか雲井にあひみさるらん(7)

と上句が類似している等、用語や用法に個性的なものはない。特に「古今集」をもとにした詠が多く、「大鏡」の宣耀殿女御芳子の例ではないが、

当時の上流女性の教養として資子も「古今集」についての素養は十分

もっていたのであろう。それを土台として、当時よく利用された用語

や用法を用いて詠出したのであろう。しかし、②の「すきにしかた」「た

れをもとまるみ」や⑩の上下句の続きがら、⑪の「ふしのねてのみ」

等は熟した表現ではなく、全体に巧みな詠とはいえないが、素朴で明

解な詠が多く、実用に根ざした即興的な詠作だったのであろう。従って、

資子の詠が当時の歌壇に影響を与えたということはなかつたらうし、

資子自身歌人としての自覚も薄かつたと思われる。

資子内親王の生涯——円融朝歌壇の側面——(安田)

資子と歌壇の関わりは、こうした詠歌中に見るのではなく、むしろ宮中であつて、円融院と共に歌会や宴を主催し、詠歌の場を提供した面に見るべきであらう。前述した如く、天禄三年の藤花宴や天延元年の乱碁歌合、それにとまなう勝態、負態歌等の盛大な会を催し、そこに当時の主要歌人を召して詠せさせており、また、資子の御殿には公達が出入し、そこでは公達と女房の文芸的交渉が行われていたのである。すなわち、資子は当時の歌壇の一サロンの主人として歌壇形成の一端を荷っていたといえよう。しかし、こうした在り方は、資子と円融院が非常に親しい関係にあつたこと、そして二人の背後に外戚としての九条家があり、常に援助を怠らなかつたから成りつたものであろう。このことは、それ以前のように天皇を中心とする歌壇とはやや異つた面がみられるのであり、萩谷氏が前述の円融院と資子の「乱碁歌合」を「宮廷における晴儀の歌合は、以後その実質上の主宰者を天皇の手から、摂関大臣の手に譲ることとなつたようである。」^(註三)と指摘されて、歌合の一つの屈折点と見ておられるが、歌合のみならず、宮廷歌壇の在り方もその前後を境として変化したのではなからうか。資子のサロンは、摂関政治の全盛期となり、後宮歌壇の開花する先がけをなすものと言えるであらう。特に、摂関期後半から院政期にかけて、内親王家がサロンのな詠歌の場を提供した子、祐子内親王や郁芳門院等の在り方と類似した面が多い。また、資子の妹、大斎院選子の場合とも共通した面が認められよう。しかし、資子のサロンには、いわゆる女房歌人達の活躍はほとんど見られず、選子以後のような独自

のサロンのメンバー(歌人)といったようなものはまだ持っていないかっ
たようである。

注一、「万代和歌集」に関する一考察「成立と歌人の面から」(『名古屋大

学国語国文学』昭52・7)

注二、山口博『王朝歌壇の研究』村上信房(昭42 桜楓社)

注三、橋本不美男『王朝和歌史の研究』(昭47 桜楓社)

注四、『平安朝歌合大成』二、七三、(昭33 私家版)

注五、『平安朝歌合大成』二、七三、別三(昭33 私家版)

注六、『平安朝歌合大成』二、七三

注七、『平安朝歌合大成』二、七三

注八、『平安朝歌合大成』二、七三所収の「負態扇歌」の内、9(中務)は「元
輔集」(I 70、II 73)、11(為光)は「順集」(I 97、II 24)、12(作者名なし)

は「中務集」(I 125、II 130)、13(作者名なし)は「能宣集」(I 331)に見え、
また「元輔集」(I 71、III 177)は本文に見えない。

注九、『平安朝歌合大成』二、別三

注一〇、『采華物語全注釈』三(昭47 角川書店)

注一一、『婦子女子采華物語人物考』(『国文学研究』昭33・10)

注三、195の詠は「玉葉集」1608に「天曆御製」として見えるが、『斎宮女御集注釈』
にいう如く、資子詠とみる方が妥当であろう。また、「小島切」(IV 54)を
参考にすると、174の詠も資子詠の可能性がある(所京子氏からもこの御指
摘を受けた)が、微子詠と見る事もできて、やや疑問の余地があるので、
あげなかった。

注三、『平安朝歌合大成』二、七三

〔付記〕本稿は名古屋平安文字研究会昭和五十七年九月例会において口頭発
表したものに加筆したものである。席上、松村博司先生をはじめ会員の方々
から御教示を賜わった。